〔書　評〕

馬渕和夫著

『五十音図の話』

肥爪周二

はじめに

著者・馬渕和夫氏の五十音図研究の出発点は、はるか戦前までさかのぼり、以後長年にわたり精力的に調査・研究がなされてきたことは周知のことである。その研究成果は大著『日本韻学史の研究Ⅰ～Ⅲ』（一九六二　六三　六五）に収められている。各巻の書評が『国語学』にも掲載されており、五十音図について直接扱っているⅡ巻の書評は森岡健二氏が担当している（第五十八集）。『五十音図の話』（以下本著）の内容の多くの部分は、『日本韻学史の研究』（以下前著）と重複しており、同一機関紙でほぼ同じ内容の対象を評するのは、先の評者が森岡氏のような大先学であるだけにやりにくいものである。しかし、著者は最近だけでも、「私の五十音図観」（『日本語学』一九九〇・二　明治書院）「醍醐寺蔵『孔雀経音義』附記の「五音」をめぐって」（『醍醐寺文化財研究所研究紀要』第一二号　一九九二・三）などの五十音図に関する論考を発表しており、本著にも、前著では取り上げられていなかった問題や、著者の考え方の変化した点など、いくつかの新見が盛り込まれているので、本書評では、そうした部分を中心に取り上げていきたい。おのずと前著の内容にも立ち入ることになるが、お許しいただきたい。

一、構成と内容

この本の構成は次の通りである。

序
一　はじめに
二　現代の「五十音図」
現代の「五十音図」　明治初年の「五十音図」「五十音図」という名称　「五十音図」教授の意味
三　江戸時代の「五十音図」
漢字音研究　五音五位之次第　漢字反切の困難さ　江戸時代初期の「五十音図」　悉曇学　契沖の五十音図観　契沖以後宣長までの「五十音図」　賀茂真渕の「五十聯音」　本居宣長の言語観　宣長以後の大勢　漢呉音図　音韻仮字用格　その他の「五十音図」
四　中世の音図
東禅院心蓮　東禅院流の「五十音図」　中世異流の「五十音図」
五音生起の「五音」　承澄の『反音抄』　信範の音図　了尊『悉

曇輪略図抄』中の「五十音図」　直拗について　直音拗音の図
相通図
五　平安時代の音図――明覚以後
明覚の「五十音図」　兼朝の『悉曇反音略釈』
六　音図の発生――明覚以前
『金光明最勝王経音義』附載の「五十音図」　寛智の『悉曇要
集記』　醍醐寺蔵『孔雀経音義』附載の音図　「五十音図」の
起源
七　おわりに
後記
索引

一見してわかるように、現代から平安時代の音図の発生へと五十音図の歴史を遡るように、倒叙式に構成されている。この倒叙方式は、すでに前著第二篇第四章「連声と音便」で採用されており、たいへん効果的であったものである。ただ五十音図の場合、時代が下るにつれて「その用途・意味付けがどんどん拡張（一三ページ）」するので、倒叙式ではかえってまとまりにくくなるのではと最初思ったが、ポイントがしぼられているため、比較的すっきりと理解できるようになっている。逆に言えば、本著は五十音図に関するすべての問題を網羅的に記述することを意図したものではないということでもある。これは、前著についても同様で、著者の扱う対象があまりに広汎・詳密であるため、しばしばそれが網羅的研究であるという錯覚をおこしてしまうのである。

また、前著の第三篇第一章「五十音図の研究」は、第十三節の「本居宣長の『喉音三行弁』について」が最終節であり、宣長の『字音仮字用格』の中の「喉音三行弁」について簡単に触れ、「国学のなかにおいて音図がどうかんがえられたかという点がのこるのであるが、これについては、いまだ資料の蒐集が十分でないので、（中略）後考をまちたい」と結んでいる。従って、「契沖の五十音図観」から現代の五十音図を扱った部分までは、本著に新しく加えられた部分ということになる。

二、「五十音図」は昔から国語の音韻図表であったか

序に「『五十音図』は昔から国語の音韻図表であったと思うことの誤りであること、いつからこれを国語の音韻図表であると認める様になったかということ、その原因は何であったかということ、さらに、漢字・真仮名・片仮名というものについての昔の人の考えが現代人と違うのではないかということ、等々について、いささかわかった様な気になってきた」とある。これに対応して本著の論述を貫く縦糸の一つに、その五十音図が「国語音」の図表であるのか、中国音や梵音をも同レベルで捉える「一般音声」の図表であるのかという視点がある。あたりまえの視点のようではあるが、図表の見た目が同じであるだけに、これらの区別には資料の丹念な読み込みが必要である。特に仮名で書かれた「一般音声」の図表の場合、実際には国語音の図表でしかないので、意識的に扱わないかぎり、無造作に「国語の音図」と呼んでしまうことがある（評者も以前明覚の音図をそう呼んでしまったことがあった）。これは前著には見られなかった新視点である。

そして、いつから、どういう経緯で「五十音図」が、外国語音とは無関係の、国語の音韻図表であると認められるようになったかと

いうのが最大の問題である。著者によると、そのさきがけは元禄八年（一六九五）刊の『仮字文字使蜆縮涼鼓集』に見え、それは実際の国語音を観察することから導き出されたものであるという。ついで、宝暦十年（一七六〇）刊の『日本書記通証』では文法の活用の面から、宝暦四年（一七五四）刊の文雄『和字大観抄』、安永五年（一七七六）刊の本居宣長『字音仮字用格』（厳密には和語音の音図ではなく、字音仮名遣いのための音図）では、外国語音との直接の対照から国語の音韻図表と認識されるようになったという。つまりは、日本語そのものの反省と、外国語との接触という二方面に、「五十音図」を国語の音韻図表と考えるようになるきっかけがあったことになる。堅実な解釈であると同時に、現代の国語研究のあるべき姿をも考えさせる事実の指摘のように思われる。

あえて希望を言えば、宣長以降、太田全齋の『漢呉音図』から、明治初年の「五十音の図」にいたる、アヤワ三行のイウエをすべて書き分ける「変てこな五十音図」に、「一般音声」的発想の混入があったのかどうか、著者の見解が知りたかった。

三、三内説について

すでに前著で明らかにされていることであるけれども、三内説によって音図の各行を口舌唇の三類に分類することは、東禅院心蓮に始まるという。

ここで問題になるのは、しばしば三内説によって音図が配列されたものとして、『反音作法』第一図、『法華経単字』（保延二年写）の「アカヤ・サタナラ・ハマワ」、『悉曇要訣』巻二の「アヤカ・サタナラ・ハマワ」、『法華経音義』（貞治四年成）の「アカヤ・サタナラ・ハマワ」があげられていることである。『反音作法』第二図の「カ・サタナラ・ハマワ・ヤ」も、第一図をもとに、ア行を別出し、ヤ行をワ行と併置するために移動したものと考えられている。著者は、これらの音図を三内説によって配列されたものとは（少なくとも積極的には）みなさないわけである。たしかに、中世まで下る『法華経音義』の音図を除けば、これらの音図に口舌唇三内の書入れがあるわけでもなく、右の引用で便宜的につけた「・」のごとき区切りがあるわけでもない。何より明覚の悉曇学では、漢字音の子音韻尾、空点・涅槃点、撥音・促音にのみ三内説が適用され、音図各行や体文の分類には用いられていないのである。明覚に音図各行の類聚意識があるとすれば、それは相通現象の観察に基づいたものであり、三内説には収まりきらない緻密なものであろう。評者を含め、これまで右の音図を三内説によって配列されたものと断じて扱ってきたのは不用意であった。

しかし、心蓮を三内説による行分類の単一の起点とすることには、やや疑問を感じなくもない。心蓮の行分類は、ア行の「ア・イ・ウ」を順に「口・舌・唇」とした上で、ア行を「口之口」、ヤ行を「口舌」、ワ行を「口唇」とするものである。ところが、明らかに心蓮の音図の影響を受けている承澄『反音抄』の音図では、ア行を「口之口」、ヤ行を「口」、ワ行を「唇」とし、了尊の『悉曇輪略図抄』の音図でも、ア行を「口」、ヤ行を「口」、ワ行を「唇」とする（一三一ページの四行目に「口」「舌」「唇」とあるのは誤り）。この他にも、この系統の三内分類に従う音図はかなりある。承澄の音図について、本著では「ヤ行は『口之舌』、ワ行は『口之唇』の一部欠落したものである」と説明され、まさしくその通りであろうが、「ア・イ・ウ」を順に「口・

舌・唇」とし、ヤ行を「イア」、「ワ行」を「ウア」のごとく分析していく東禅院流の音図の構成から見て、承澄や了尊の改変には、東禅院流とは別系統の素朴な形の三内説の混入の可能性があるのではないだろうか。さらに想像を逞しくするならば、明覚の著作などに見えた「三内説」風行配列も、明覚の当時に世間で行なわれていた、ア行・ヤ行・ワ行を順に「口・口・唇」とする素朴な三内説による音図の整理法が顔を出しているものとは考えられないだろうか。

明覚以前の音図は、学問の表の世界に出てくるような性質のものではなかったため、その形態は、音義の余白に記されたために偶然残ったものや、歌学書に部分的に引用されたものからしか知ることができない。それゆえあれこれ想像をめぐらして楽しんでしまうのだが、以上のような評者の「三内説」についての妄想は、著者の実証的研究態度には馴染まないものであるから、本著で触れられていないのも当然ではある。

四、音図の種類について

著者は、前著および『国語学大辞典』（国語学会編）で、音図の種類を「反切のための図」「相通図」「直音拗音の図」「五音五位之次第」に分けているが、本著ではその用途・形式の相違について説明は、ほとんど省略されている。著者の考え方が変化したためではなく、単に論述の都合に過ぎないのではあろうが、かなり長いことこれらの音図とつきあわなければならないので、前著や『国語学大辞典』であらかじめ確認してから、あるいは確認しながや本著を読むと良いであろう。注意しないと単なる音図の名称の差異と思って読み飛ばしてしまいそうである。

また、一三八ページに「直音拗音の図」の発生についての説明があり、前著ですでに提出されている「了尊誤解説」が述べられているが、これはもちろん「直音・拗音」という「用語」に限った問題である。「反切のための図」と「直音拗音の図」との違いの説明が省略されているだけに、誤解されてしまう可能性がある。

五、『孔雀経音義』附載の音図について

言うまでもなく現存最古の音図と目されているものである。この音図の用途を、前著では「もし漢字音と関係あるとしても、反切のためではない（九一九ページ）」とされていたが、本著では、「漢字音の反切をする場合、反切上字の頭音が五音に変化すること、ハ行の場合は上字の頭音はハヒフヘホの五音に変化するが、熟語の下位になった場合はワヰウヱヲになることを示したものといえよう（一七四ページ）」とあり、この音図が漢字音の反切に利用されたとするようになった点が、大きく変化している。しかし、「五十音図」の交点を利用して漢字音の反切を行なう方法自体は明覚の発明であるとする点は変化していないので、実は前著と著しく考え方が変化しているわけでもない。結局、明覚の創意がどのレベルのものであったかという点が、今後の論点となっていくのであろう。

これに関連して、いわゆるハ行転呼音についてであるが、著者は前著と同様、『反音作法』嘉保二年本の追記にある、

周遍（シュウヘン）　大悲（タイヒ）　五百（コオヒヤク）　二一百（ニイヒヤク）
比巴（ヒイワハ）　率波（ソツトハ）

の例を挙げ、漢語でもハ行転呼音が生じることの証とされる。確かにそのようなことがあったことは認めなければならないが、やはり、

特殊な例の感をいなめない。この追記にあげられているのは、「任意（ジムミ）」などの連声と右のようなハ行転呼音の例である。そして、その連声は「漢音直読資料には全く見られない」（沼本克明『日本漢字音の歴史』二四四ページ　東京堂出版）との報告もあり、ましてや漢語のハ行転呼音の例は、漢音で直読される文献として名高い『孔雀経』では現われる可能性が低いのではないだろうか。というようなことを、以前直接著者に伺ったことがあるのであるが、それは理に走りすぎた考え方であるとの御返事であった。たしかにそうであるが、やはり、ハ行・ワ行併記の理由をハ行転呼現象に求めるのならば、実際には漢語でハ行転呼は起きなかったけれども、和語のハ行転呼現象の影響で、深く考えずに音図にハ行・ワ行を併記したのであるという解釈のほうが、評者には受け入れやすい。

ちなみに、『反音作法』追記の漢語のハ行転呼音の終わりの二例、「比巴　率堵波」はともに音訳語であり、その表記・読み方は「真仮名」に似ていなくもない。あるいは『孔雀経』の場合も、陀羅尼・音訳語の部分では、和語的な音変化が起こりえたのだろうか。

また、この音図がア行・ナ行を欠いている理由の解釈が、前著に比して踏み込んだものとなっている。前著では、「もし韻紐図の様なものを国語においてもつくろうとするならば、縦横の相通の理さえわかればよかったのだから、最低二行あればよいので、全行そろう必要はなかった」とのみ述べられているが、本著では、結論の部分だけ抜き出せば、「たまたまその行の音が頭にくる反切を試みることが無かったという偶然性によるのではないかと思われるのである（一七三ページ）」とある。十分に可能性はあるが、これは、「ア行・ナ行の音が頭にくる反切を試みること自体はあったとしても、その五音を口で唱えればすむので、わざわざ書き足すまでもなかった」と解釈するほうが無難ではないだろうか。

これに関連して、一七二ページで、漢音読み仏典の中にもマ行・ナ行が用いられるということを具体例を挙げて論じているが、漢音直読資料といえども、陀羅尼や音訳語の部分は必ずしも漢音（というよりも通常の字音）では読まれないことや、鼻音韻尾を有する明母・泥母・娘母の文字は、漢音でもマ・ナ行が保たれることがあるのは周知のことであるのだから、それらがはっきり分かるように分類して提示したほうが良かったかもしれない。実は、著者は先出の一九九二年論文でも、このマ行・ナ行の問題に触れているのだが、そこでは、「日本に伝来した漢音というものは流派伝流によって複雑であり、さらにいわゆる呉音というものの混入もあり、決して単純ではない。したがって、漢音という単一体系があるわけではないから、ある流派によってはナ行音がなく、マ行音があったという可能性を否定することはできない」と述べられている。この考え方が本著では撤回されているように読めるが、それで著者の意図通りであろうか。

六、音図の起源について

本著の「六　音図の発生」の章は、「『五十音図』は悉曇学と漢字音韻学の二方面から発生し、両方の機能が平安時代末に一緒になって定着したと考えているのである」という言葉で結ばれている。従来の音図起源説には、悉曇学起源説と漢字音韻学起源説の二つの主要な立場があり、それぞれにもっともな根拠があったのであるが、著者は「多元的起源説」を提出し、これによって従来の学説の対立

を解消した。これは、単なる折衷案などでは決してなく、五十音図の歴史を、より立体的に、ドラマティックに見渡す着想である。この考え方によると、悉曇学起源・漢字音韻学起源のそれぞれの内部においても、複数の起源が想定されうることになる。明覚以前の音図の伝存状況が、あまりにまばらであり、それらの関連を勝手に想像していた従来の研究の問題点も、自ずと解消されることになる。まさにコロンブスの卵のごとき創見である。

ところで、前著に述べられた音図の起源論では、音図は、古代日本人に存在した音通の認識を背景に、韻紐図にならって国語音を整理したものであるということであった。この前著の音図の起源論は、本著では一切削除されている。「国語音」を整理したという部分は別として、少なくとも漢字音韻学系統の起源としては、本著の内容と矛盾しないはずであるし、古代日本人に音通認識の存在を想定することは、むしろ多元的起源論にとって有効であるように思われる。音図の起源論に、音図成立の地盤の問題と音図作成の動機・目的の問題が混在することを避けるために、あえて省略したのであろうか。

七、最後に

前著『日本韻学史の研究』がすでに入手しにくくなった現在、貴重な図版が数多く掲載されている本著がかなりの廉価で出版されたことは、特に評者のような若い世代のものにとっては喜ばしいことである。前著には掲載されていない音図もいくつか見られる。このように眺めて楽しい研究書というのは、そうあるものではない。本のサイズ・分量も適度で、大矢透『音圖及手習詞歌考』、山田孝雄『五十音圖の暦史』と書棚に三冊並べると、まるで三部作のような錯覚をおこしてしまう。もちろん内容的にも、ホップ・ステップ・ジャンプのジャンプに相当するものであることは言うまでもない（今後、五十音図の新資料が続々と発掘されるというようなことはあまり期待できないので、五十音図の歴史を総合的に論じる専書は、本著が最後になるのではないかという気さえするからでもある）。

日本韻学を研究する誰にとっても、前著『日本韻学史の研究』は、これがなければ一歩も先に進めないという性質の基本図書である。この中の五十音図に関わる部分について、著者の見解がさまざまに変化していることを本著によって知るとき、五十音図以外の他の部分について、現在の著者の見解がいかなるものであるか、非常に興味を感じる。われわれ後学のためにも、何らかの形でそれが公表されることを願ってやまない。

以上、評者の興味に即して、いくつかの問題を取り上げてきた。本著の広汎な内容のごく一部にしか言及していなかったり、書評の範囲を逸脱して評者の見解を述べてしまった箇所があったりして、あまり書評の体裁をなしていないが、お許しいただきたい。

（平成五年七月一日発行　大修館書店刊　A5判　一九一ページ　定価二〇〇〇円）

——明海大学講師——

（平成六年二月十六日　受理）